

Card Magic Magazine



No. 20

December 6, 2013

by Hideo Kato

カードマジック徹底研究

オーダートリック

ファイブインナロウ

= ニック・トロスト、雑誌“ニュートップス”、1964年12月号 =

5枚のカードが逆順になる‘パ lindローム’現象は、雑誌“Gen”、1965年6月号の、ノエル・スタントンの‘1-2-3-4-5’が原点であることが認められていますが、5枚のうちの両端のAと5を入れ替えると逆順になる、という現象はスタントン以前に存在していたことを見つけました。

雑誌“ニュートップス”、1964年12月号のトロストの‘ファイブインナロウ’です。半年の差ですから、スタントンがトロスト作品に影響を受けた可能性はあります。いずれにしても、記録に残されるべき作品だと思います。

* 方法 *

デッキからダイヤのAから5を抜き出して使います。フェースからA～5の順と並べます。

5枚を表向きに右手のビドルポジションに持ち、「ダイヤのAから5が順に並んでいることを確認しておきましょう」と言って、Aを左手に引いて取り、つぎの2をその上に取りますが、下にブレークを作ります。

つぎに3を取るとき、2を右手のカードの下にスチールします。3の下にブレークを作ります。4を左手に取るとき、3を右手のカードの下にスチールします。そして重なっている3枚を5として左手のカードの上に置きます。「A、2、3、4、5」と言いながら行います。

5枚を裏返し、テーブルに左から右に横一列に並べます。「どちらがAかおぼえていますか」と問いかげ、返答にかかわらず左端のAを表向きにします。「5はこちらです」と言って、右端の5を表向きにします。

「Aと5を入れ替えると不思議なことが起こります」と言って、Aと5を交換します。そして他のカードを表向きにして、逆順になったことを見せます。

スウィンドルオブソーツ

= ポール・カーリー、“ポール・カーリープレゼンツ”、1974年 =

* 方法 *

スペードのカード 13 枚を抜き出し、残りのカードは使わないのでわきに置きます。

「スペードの 13 枚をAからKまで順番に並べます」と言って、13 枚を表を自分に向けて広げていき、まずAを左手で抜き出します。図1。



つぎにスペードの2を見つけて、左手のAの上に引き抜きます。図2。



同様にして3を2の上に引き抜きます。カードを引き抜くときは「A、2、3、」と声を出して取ったカードの数を言いながらやります。カードを左手に取るたびに、左手を前に倒して、取ったカードの表を相手の方に向けます。

つぎに「4」と言ってカードを引き抜くとき、4ではなくて5のカードを引き抜きます。続いて「5」と言って4のカードを引き抜きます。5と4を引き抜いたときは、カードの表を見せずに、たんに左手を左方に動かすだけにします。そのあと6以降は順番通りに取っていきます。

13 枚を左手に裏向きに持ちます。「これからカードをテーブルに置いていきますが、あなたの指示によって順番を変えます。このように1、2、3と置いていって」と言いながら、トップから1枚ずつ3枚をディーリングします。

「あなたが“ストップ”と言ったときに、このように2枚の順番を入れ替えます」と言って、右手に4枚目のカードを取り、5枚目のカードを左親指でプッシュし、その下に4枚目のカードを入れ、それら2枚を右手に取り、2枚をテーブルの上のカードの上に置きます。

「あなたが何も言わなかったら、このように6、7とそのまま置いていきます」と言って、6枚目と7

枚目を1枚ずつテーブルのポケットにディールします。

テーブルの7枚を表向きにして広げます。A、2、3、5、4、6、7の順になっています。「このようにあなたが“ストップ”といった部分は順番が入れ替わるわけです」と言います。「順番をもとに戻します」と言って、Aから7までの表向きの7枚を取り上げ、裏返して左手のカードの上ののせます。

上からA、2、3、5、4、6、7となっています。Aを右手に取り、表向きにしてテーブルに置きます。2を表向きにして取り、Aの上ののせます。3も同様に表向きにしてディールします。つぎの2枚を入れ替えて、2枚をいっしょに表向きにしてテーブルのポケットに置きます。6と7を1枚ずつ表向きにディールします。

「ほら、もと通り順番に並びました」と言って、7枚を広げて見せます。7枚を取り上げて、裏向きにして左手のカードの上ののせます。

「カードを1枚ずつ置いていきますから、2枚を入れ替えるときは“入れ替え”と言ってください。全部で13枚のカードがありますが、適当に3カ所で“入れ替え”と言ってください」と説明します。

「私はこれから起こることを予知して、3カ所のカードを入れ替えておきます」と言って、カードを背後、もしくはテーブルの下に運びます。そして先ほど入れ替えた2枚をもとの順に戻します。いかにもカードを入れ替えているような両手の動きをしますが、実際は何もしません。

13枚を前に出し、「それでは始めましょう」と言って、上から1枚ずつ取り、右手に取ったら1秒ほど停止させ、相手が何もいわなかったらそのまま裏向きにディールします。相手が“ストップ”と言ったら、右手のカードと左手のトップカードを入れ替えて、2枚を裏向きにディールします。そのようにして、相手の意志にしたがって、13枚をディールします。

ディールされた13枚を裏向きにして相手に渡し、「Aから順番に数えながらカードを表向きに置いていってください」と指示します。相手がそのように13枚を表向きにディールすると、13枚はAからKまできちんと並んでいます。まさしく、あなたは相手の意志を的確に予知したように見えます。

* 備 考 *

雑誌“エピローグ”、1974年7月号の、ハーブ・ザロウの‘スウィンドルメイト’では、同じ原理を使って、カードが順番に並ぶというのではなく、順番を変えた結果が、別のポケットと一致するという現象になっています。つぎのようにやります。

スペードの13枚とハートの13枚を使い、ハートの13枚をあらかじめメモライズドオーダーにセットしておきます。スペードの13枚を使い、相手の指示によって順番を入れ替えるのを説明したあと、

カードの順番を混ぜると言って、スペードの13枚をわきに置いてあるハートの13枚と同じ順番にします。そして相手の指示によるディールを行ったのち、スペードの13枚とハートの13枚を同時に表向きにさせます。すべてマッチしています。

ポール・カリーの“スウィンドルオブソーツ”は、まったく非の打ち所のない手順のように思えるかも知れません。しかしながら、裏向きで交換の例を見せたあと、さらに表向きで交換の例を見せるというのは、カードが入れ替わるということを2度証明していることになり、そのくどさが逆に印象を弱める働きをしています。しかもそのハンドリングを行うために、最初にAからKまで並べたことを見せられないという、重大な欠陥を発生させています。

下村知行氏の天海賞受賞記念出版“セリフワーカー 1.0J”(1997年11月24日刊)で発表された‘ダービーの予言’において、下村氏はその証明を表向きにディールするだけの1回だけに変更いたしました。この省略によって、理屈っぽい証明はビジュアルな証明となり、観客に負担を与えないマジックとなりました。この考え方をカリーのマジックに逆輸入すると、つぎのようになります。

ひとつのマークのAからKまでを抜き出して表向きにテーブルに置きます。「カードの順番を混ぜますが、あなたが“そのまま”と言ったら、このようにそのまま1枚を置きます」と言って、トップの1枚を取って表向きにテーブルに置きます。「あなたが“入れ替え”と言ったら、このように2枚を入れ替えて置きます」と言って、つぎの2枚を裏向きに入れ替えてから表向きにして、テーブルのAの上に置きます。「つぎが“そのまま、そのまま”、そして“入れ替え”だとこのように置きます」と言って、セリフに合った置き方をします。「このようにカードは混ぜります」と言って、カードを広げて見せます。

カードを取り上げて手元のカードの上ののせ、「あなたが言うことを予測して、カードをある順番に並べます」と言って、表を自分に向けてカードを入れ替えますが、いかにも適当に入れ替えていると見せて、AからKまできちんと並べます。

そして相手に“そのまま”とか“入れ替え”と言わせ、先ほどの説明と同じようにカードをディールしていきますが、こんどはカードを裏向きに置いていきます。すべてのカードをディールしたら、カードを表向きにスプレッドして、AからKまで並んでいることを見せます。

表向きでいちどカードの入れ替えを見せるだけで、十分相手は錯覚を起こすのです。2度説明を行って理論的に証明を強化したと思っても、せっかくながらビジュアルに錯覚を起こしたものを弱めることになっていると思われれます。

なお、2002年7月15日発行の“CARD MAGIC MONTHLY”第4号において、このトリックにボウリングの演出を加えた‘ナイスストライク’を解説いたしましたが、ここに再録しておきます。

ナイスストライク

= 加藤英夫、“Card Magic Monthly” 第4号、2002年6月23日 =

* 方法 *

「ボウリングにちなんだマジックをお見せします」と言って、ダイヤのAから10を抜き出して、残りのカードはわきに捨てます。トップからA～10の順番に並べます。

「カードの順番を混ぜますが、あなたが“そのまま”と言ったら、このように1枚のカードをそのままテーブルに置きます」と言って、Aを右手で取って表向きにしてテーブルに置きます。「あなたが“入れ替え”と言ったら、このように2枚を入れ替えてからテーブルに置きます」と言って、2と3をプッシュして2を3の下に入れて、2枚を表向きにしてAの上ののせます。いまテーブルに置かれた3枚は、下からA、3、2の順になっています。

「さらに“入れ替え”なら入れ替えて置き」と言って、上下入れ替えた4と5をテーブルのカードの上に表向きに置きます。「“そのまま、そのまま、そのまま”そして“入れ替え”というように」と言いながら、セリフ通りにカードを“そのまま”か“入れ替え”して置いていきます。そして「あなたの指示通りにカードを置いていきます」とセリフを続けます。テーブルのカードを広げて、カードが混ざったことを強調します。

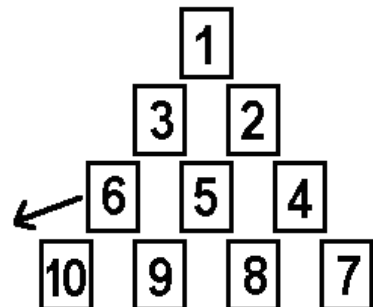
以上の説明において“そのまま”と“入れ替え”は適当な位置で行ってかまいません。やり方が相手によくわかればよいのです。

「カードの順をさらに変えます」と言って、カードを取り上げて、表を自分に向けてカードを入れ替えますが、Aから10の順に戻します。

カードを裏向きに持ち、「最初はどちらにしますか」とたずねて、相手の指示通りにカードを置いていきますが、こんどはカードを表向きにせず、裏向きのまま置いていくところが違います。1枚置くときも、2枚を上下入れ替えて置くときも、裏向きにテーブルのカードの上に置きます。

結果としてテーブルに置かれたカードは、トップから10～Aの順のままですが、相手は順番が変わったと錯覚します。

カードを取り上げて、「ここでボウリングの話になりますが、ボウリングでは10本のピンが三角形に置かれます」と言って、右図の10の位置から1の順に向かってカードを置いていきます。置かれたカードの数はボウリングの1番ピンから10番ピンに一致しています。



「あなたの指示によって、数の順番はでたらめになっているはずですが。魔法をかけましょう」と言って、魔法をかけます。「さて、ボウリングのボールが1番ピンと3番ピンの間に当たるとこのようなことが起こります。まず1番ピンが倒れ、1番ピンが2番ピンを倒します」と言って、Aと2を表向きにします。「そしてボールは3番ピンも倒します」と言って、3を表向きにします。

「2番ピンは4番ピンを倒し」と言って4を表向きにし、「3番ピンは5番ピンと6番ピンを倒します」と言って、5と6を表向きにします。「そしてそのあと7番ピン、8番ピン、9番ピンと倒れて」と言いながら、7、8、9と表向きにします。

「ボウリングでいちばん問題なのが、この6番ピンの飛び方です。こちらの方向に飛ぶと」と言いますが、前ページの図の矢印のように、10に触らないような方向を示します。「10番ピンが残りやすいのです。でも今日はうまく10番ピンも倒れました」と言って、10を表向きにします。

以上のようにまとめましたが、“たんにボウリングの話をつけただけじゃないの”といわれるかも知れません。しかしながら、トリックにうまくマッチする話を考えるということは、むしろトリックそのものを考案することよりも重要であるかもしれないという考えが、いま頭の中に浮かんでいます。

上記のマジックでは、カードのAから10までにボウリングの10本のピンというキャラクターを与え、その性質を話に利用しましたが、そのようにすることによって、マジック以外の面白さを取り入れられる可能性があるのです。

私は機会あるごとに、演出の重要性を指摘してきましたが、今日は演出についていままでと違うたとえ方をしてみましよう。料理で言えば、演出は調味料のようなものです。調味料の味付けいかんで素材の良さが生かされるかどうかということです。

ただし、ストーリーを演出としてトリックに加えるとき、ストーリーの要素がマジックの要素の影を薄くするほど多くを占めてはいけません。けっこうこれを間違えるマジシャンが多いように思います。

ストーリーマジックと称したカードマジックの本もアメリカで出ていますが、かなりストーリーの要素が強いものが多いようです。ストーリーの面白さを主張したいなら、マジックなんて初めからやらない方がよいのではないかと思ってしまうぐらいのものもあります。

マッチングオーダー

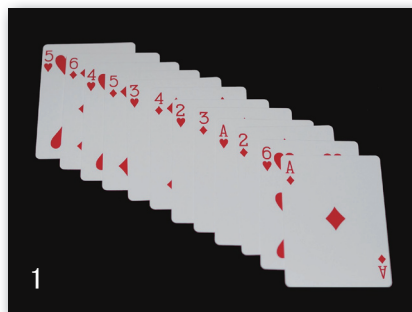
= 加藤英夫、考案日不明 =

これは、' マッチングペアーズ' の原理を利用して、ペアがマッチすると同時に、ペアの順番がAから6まで並ぶという二重現象です。

* 準備 *

1組の中から、ダイヤとハートのAから6までを抜き出して使います。裏向きで、A、A、2、2、3、3、4、4、5、5、6、6の順にします。いちばん下の6のカードを上にもわします。

上から2枚のカードを、順番を変えないように取り、テーブルに置きます。つぎの2枚を同じように取り、テーブルのカードの上に重ねます。以下、2枚ずつ取ってテーブルのカードに重ねます。以上の結果、12枚のカードは図1の順になりました。



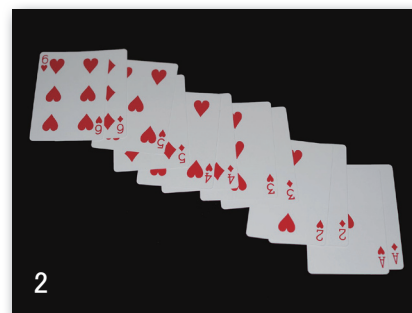
* 方法 *

カードを表向きに広げ、「Aから6までの数がよく混ざっています」と言います。カードを閉じて裏向きに持ちます。上から2枚のカードを少し広げて取り、表を相手に見せ、「2枚ずつ取ると、必ず違う数のカードです」と言います。

その2枚をそろえて裏向きにテーブルに置きます。つぎの2枚を同じように取って表を見せて、「これも違う数です」と言って、先に置いたカードの上に重ねます。以下同様に2枚ずつ見せてから、テーブルのカードに重ねていきます。

左手にカードを取り上げ、「少しカードを混ぜます」と言って、カードに右手をかけますが、いちばん上のカードの下に右親指でブレークを作り、ブレークを利用してダブルカットを行います。いちばん上にあつた1枚が下にまわされることになります。

カードに対して魔法をかけるジェスチャーをします。上から2枚取り、少し広げて表向きテーブルに置きます。続けて2枚ずつ取り、表向きにして、先に置いたカードにずらして重ねていきます。最終的に、図2のように置きます。Aから6までのペアがそろいました。



オートマジック電卓

= 加藤英夫、1998年12月2日 =

1を7で割ると答えは0.142857142857,, という循環数になります。この142857という6桁の数字は不思議な性質があって、1から6までの数字を掛けると、必ず142857を1回カットして並べ替えた数字になります。たとえば3をかけると、答えは428571となります。マーチン・ガードナーの'数学マジック'には、つぎのような応用が書いてあります。

A、4、2、8、5、7のカードを抜き出し、その順番を紙に書かせます。相手に1から6までで好きな数を選ばせ、掛け算を行わせます。マジシャンは素早く下1桁と選ばれた数を掛け合わせ、答えの下1桁がいくつかになるかを知ります。そしてそのカードがボトムにくるようにポケットをカットします。相手が計算を終えたら、「こちらはとっくに計算が終わっています」と言って、相手の計算結果と、トップから表向きにした数字が一致しているのを見せます。

この見せ方は、奇妙な感じを与えることはできますが、マジックとしての不思議さとはいえません。この原理を利用してマジックを作るポイントは何でしょうか。それは、相手が掛ける数を相手にたずねないことです。そのことに気づいて、このトリックを作りました。

* 方 法 *

12枚のカードを抜き出して使いますが、トップからA、4、2、8、5、7、A、3、2、6、4、5の順になるようにします。これらを何回かカットしたり、全体が狂わないフォールスシャフルを行います。最終的に初めの順番に戻します。

順番が変わらないようにトップから6枚のカードを取り、2つのポケットをテーブルに置きます。「あなたにこれから使うカードを選んでいただきます」と言って、どちらかを指ささせます。142857ではない方が指さされたら、「それではあなたにそのカードを使ってもらいます」と言って、相手の近くに置きます。142857のポケットが指さされたら、「それではこちらを使います」と言って取り上げます。

142857のポケットのカードを表向きに並べ、その順番を相手に紙に書かせます。そのあと142857をもとの順にそろえてあなたが持ちます。他方のポケットを相手に持たせ、「それではあなたと私が同時にカードを上から下にまわしていき、あなたの好きなところでストップをかけてください」と言って、お互いにトップからボトムにカードをまわしていきます。

ストップがかかったらあなたのポケットをテーブルに置きます。相手のポケットのトップカードをそとのぞいて見させ、その数を142857に掛けさせます。相手が計算を終えたら、「私の方は自動的に答えが出ています」と言って、あなたのポケットを取り上げ、計算結果とトップからのカードの数字が一致しているのを見せます。

パーフェクトオーダー

= 加藤英夫、2005年2月21日 =

* 方法 *

スペードのAから9までの、9枚のカードを使いますが、Aと9に識別できるドットを打っておきます。9枚を、裏向きのトップから、6、3、9、5、2、8、4、A、7にセットしておきます。

表向きに広げ、スペードのAから9までがあり、混ざっていることを見せます。

あなたが後向きになっているときに、相手にやってもらうことを説明します。裏向きにして、左から右に3つのパイルにディールします。「このように3つの山に配り、好きな順で重ねてください」と言って、中央の山を取り、それを左の山に重ね、それらを右の山に重ねます。

相手に9枚を渡し、後ろ向きになり、説明したことをやってもらいます。終わったら、「もういちど3つの山に配り、好きな順で重ねてください」と言います。

相手がやり終わったら前に向き直り、9枚を受け取ります。「私も2回同じように順番を変えます」と言って、2回ディール&パイルを行います。1回目では、Aの含まれた山をいちばん下、9の含まれたパイルをいちばん上に重ねます。2回目では、Aの含まれたパイルをいちばん上、9の含まれたパイルをいちばん下に重ねます。

「お互いに自由にカードの順番を変えましたが、不思議なことが起こっているはずですよ」と言って、9枚を表向きにリボンスプレッドします。Aから9までが整列しています。

* 備考 *

つぎのようなやり方もできます。

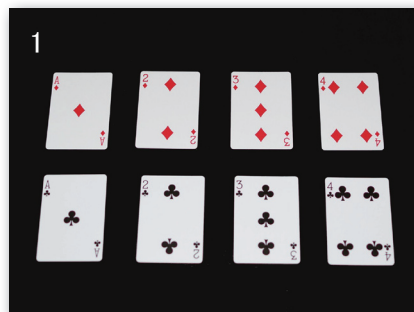
最初に1枚のカードを逆向きにさせてから行います。すべてが終わってから、表を相手に向けて広げると、最初にひっくり返したカードだけ相手の方に表が向いているので、そのカードを言い当てます。「なぜ数がわかったかというと、カード全体がこのようになっているからです」と言って、順番に並んでいるのを見せます。

ハマンイットアップ

= ジョン・ハマン、雑誌“リンクリング”、1982年2月 =

* 第1段 *

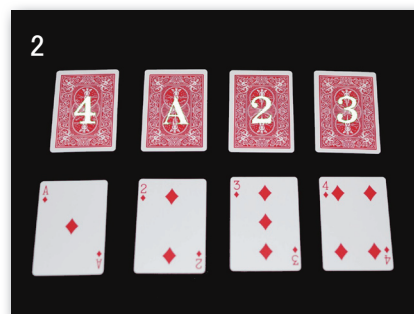
ダイヤのAから4までを一行に表向きに並べます。その下にクラブのAから4までを一行に表向きに並べます。図1。



クラブの4をダイヤの4の上に重ね、それらをクラブの3、ダイヤの3、クラブの2、ダイヤの2、クラブのA、ダイヤのAの順に重ねます。それから全体を裏向きにします。

トップの2枚を右手に取ってファンに広げ、いったん2枚をトップに置き、「2枚ずつ取ると同じ数のカードです」と言います。ファンになっている2枚を取ると見せて、トップカードとボトムカードを取ります。下の1枚をテーブルに裏向きに置き、その下に残りのダイヤのAを表向きに置きます。

つぎのカードを裏向きに裏向きのカードの右に置き、つぎのダイヤの2を表向きのダイヤのAの右に置きます。以下同様に置きます。上に裏向きの4枚が置かれ、下に表向きのダイヤのAから4までが置かれました。



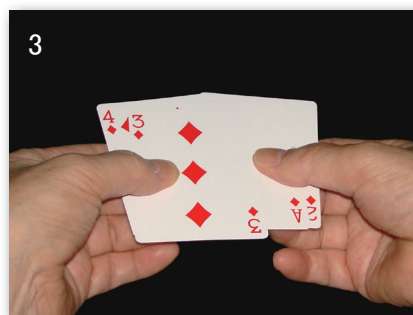
裏向きの4枚は、観客にとっては下のカードの数と同じと思われていますが、実際は図2で数字で示している通りです。

カードの位置を変えても、表向きのカードの影響を受けると言って、裏向きの左から1枚目と2枚目を入れ替えます。そして左から1枚目を表向きにします。クラブのAです。左から2枚目と3枚目を入れ替えて、2枚目を表向きにします。クラブの2です。左から3枚目と4枚目を入れ替えます。そして3枚目を表向きにします。クラブの3です。4枚目を表向きにします。クラブの4です。

* 第2段 *

ダイヤの3と4を表向きに左手に持ちます。3が上です。右手にダイヤのAと2を表向きに持ちます。Aが上です。

右手のカードを左手のカードの上に重ねて、全体を裏返す動作を続けますが、2を4の向こうに入れてしまいます。図3。裏返すと、2、4、3、Aとなります。



右手をエルムズレイカウントのときと同じように、パケットの右サイドにかけ、左親指でトップカードだけを少し上にずらしてやり、右手は下の3枚をいかにも1枚のごとく引出し、図4、



そして右手の3枚を1枚のごとく左手の1枚の上に表向きに返してのせます。アルトマントラップに受け止めます。3枚を裏返し、トップの1枚をクラブのAの下に裏向きに置きます。残りの3枚から上の1枚を左手で引き、右手の2枚をトップに表向きに返して左手のカードの上ののせます。2が見えます。2枚を裏返し、上の1枚をクラブの2の下に置きます。

上の1枚を左手で引き、右手の1枚を表向きにして3を見せ、それを裏返して、クラブの3の下に置きます。残りの1枚を表を見せずに、クラブの4の下に置きます。

クラブのAと4を入れ替えます。少し考えてから、Aと2を入れ替えます。ダイヤの4枚を表向きにします。上と下のカードがマッチします。

*** 第3段 ***

滅茶苦茶に混ぜると言って、ダイヤのAをクラブの4の上に置きます。ダイヤの3をクラブの2の上に置きます。ダイヤの2をクラブのAの上に、ダイヤの4をクラブの3の上に置きます。全部違う組合せだということをいいます。ダイヤが下のクラブが見えないように重ねること。

ダイヤのAの2枚をダイヤの4の2枚の上に重ねます。ダイヤの3の2枚をダイヤの2の2枚の上に重ねます。最後にダイヤのAの4枚をダイヤの3の4枚の上に重ねます。

ダイヤのAを右手に取り、残りのカードをすくって取り、裏向きに左手に持ちます。ダイヤのAを裏向きに置き、その下にクラブのAを表向きに置き、以下、裏向きの下に表向きに置いていきます。クラブのAから4までが並びました。それからドラマチックに、ダイヤのAから4までを表向きにします。

アズユーワー

＝ロイ・ウォルトン、“カードカヴァルケイド”、1975年＝

* 現象 *

スペードのAから4までを順番に並べて見せたあと、それらの順番を入れ替えてから、'魔法の数え方'を行うと言って、裏向きにして1枚ずつ数えて逆順にします。表向きにして広げると、Aから4まで順に並んでいます。2回目は1回目と違う入れ替え方をしますが、'魔法の数え方'を行うと、やはりもとの順に戻ります。最後はまえの2回よりもっとでたらめに見える混ぜ方をします。それでも'魔法の数え方'を行うと、もとの順に戻ってしまいます。

* 技法 *

このトリックでは、4枚のカードを4枚のカードにカウントするのに、3つの異なるカウント方法を使います。1回目はエルムズレイカウント、2回目はジョーダンカウント、3回目は著者のジェリー・メンツァーが'エルムズレイジョーダンカウント'と呼ぶ、エルムズレイカウントとジョーダンカウントを混ぜたようなやり方です。そのやり方を説明しておき、方法の説明ではたんに“エルムズレイジョーダンカウントを行います”と表現いたします。右手から左手に取るやり方で説明いたします。

1枚目と2枚目まではエルムズレイカウントと同じです。すなわち、1枚目をふつうに取り、2枚目でダブルプッシュした2枚を取りつつ、1枚目を右手のカードの下に戻します。3枚目では右手の2枚を取ってしまい、いちばん下のカードを右手に戻します。そしてその1枚を4枚目として取ります。

* 方法 *

スペードのAから4までを抜き出して使います。表向きでフェースからA、2、3、4として、広げて順番になっていることを示します。

Aと2をいっしょに右手で取り、3と4の間に入れます。「このように2枚を移すと、全体の順番が狂ってしまいます」と言います。

カードをそろえて裏返し、「ところが'魔法の数え方'を行うと」と言って、エルムズレイカウントを行います。そして表向きにして広げ、「もと通りになってしまいます」とセリフを続けます。

「こんどはまん中の2枚を抜いて、上に移します」と言って、2と3をいっしょに抜いてフェースにのせます。

カードをそろえて裏返し、「それでも'魔法の数え方'を行うと」と言って、ジョーダンカウントを行

います。そして表向きにして広げ、「もと通りになってしまいます」とセリフを続けます。

「こんどはもっとでたらめに入れ替えます」と言って、Aを2と3の間に移します。そして4を3とAの間に移します。

広げたまま左手に持ち、右手で2を取り、「ここにAはありませんし」と言います。つぎのAを2の上に取り、「ここに2はありません」と言います。つぎの4を右手のカードの上に取り、「ここに3はありませんし」と言います。最後の3を上に取り、「ここに4はありません」と言います。

4枚を広げ直し、「こちらから数えても」と言って、ファンの右端から左端に向かって1枚ずつ指さしながら、「1、2、3、4、どれも違う位置にあります」と言います。「反対から数えても」と言って、こんどは左端から右端に向かって1枚ずつ指さしながら、「1、2、3、4、どれも違う位置にあります」と言います。

カードをそろえて裏返します。「ところが『魔法の数え方』を行うと」と言って、エルムズレイジョーダンカウントを行います。そして表向きにして広げ、もと通りになっているのを見せます。

魔法の数え方

= 加藤英夫、2012年9月30日 =

前述の『アズユーワー』はたいへん面白い作品です。しかしながら、“順番を狂わしたのにもと通りになる”、という現象が3回繰り返されただけです。何とかクライマックスをつけたいと思いました。強烈なクライマックスは無理としても、それまでとは違う表現方法がないかと思いました。そこでつぎのような2つのステップを加えました。原案が終わって、フェースからAから4まで並んでいる状態から続けます。

* 方 法 *

「ところで順番を変えないで『魔法の数え方』をやるとどうなるでしょう」と言って、4枚を裏返し、エルムズレイジョーダンカウントを行います。表向きにして広げ、「ほら、でたらめになってしまいました」と言います。

「しかしもういちど魔法の数え方を行うと」と言って、表向きのままエルムズレイジョーダンカウントをやって、すぐに広げます。「もと通りになってしまいます。きりがないのでこのぐらいにしておきましょう」というセリフで締めくくります。

テンギブズスリー

= ブルース・サーボン、“アルティメイトシークレツツオブカードマジック”、1967年 =

* 現象 *

マジシャンはクラブのAから10まで並んだ10枚のカードを見せ、それらを両手の間に広げ、顔を横に向けて、相手に1枚抜かせます。抜いたカードの数を記憶させ、それパケットの中に返させます。パケットを相手に渡し、相手がおぼえたカードの数だけ、トップからボトムにまわさせます。それからパケットを表向きにリボンスプレッドすると、Aから10までが並んでいます。これが第1の驚きです。

スプレッドの中には、相手がおぼえた数のカードの位置に裏向きのカードがあります。これを抜き出して表向きにすると、ジョーカーです。これが第2の驚きです。

第3の驚きは、相手がおぼえた数のカードがポケットから出てきます。

* 方法 *

デッキからクラブのAから10までを抜き出して、フェースがAでバックが10の順にしますが、ジョーカーも抜き出してフェースに置きます。

その11枚を裏向きに左手に渡すとき、ボトムのジョーカーを密かにリバーズします。ここまでは観客の注目を集めないで行います。ブルース・サーボンは、その状態にしたところから演技を始めるときもあります。

「クラブのAから10までを並べました」と言って、クラブの10を右手に取って右手を返して表を観客に向け、その下にクラブの9を取って右手を返して表を観客に向け、ということクラブの2まで行います。2まで見せたら、左手の方を見て「そしてAです」と言って、右手のカードを左手のカードの上ののせてそえろます。

カードを両手の間に広げますが、最後の表向きのジョーカーは見えないようにします。そしてあなたの顔を左に向けてカードの方を見ないようにして、相手に1枚のカードを抜かせます。

相手が抜いたら、抜かれたところから分けて、右手のカードを左手のカードの下に入れますが、ジョーカーをバックルして、ジョーカーの上に入れます。図1。そして入れたカードの上にブレークを保ちます。



相手が抜いたカードを見ておぼえさせ、ブレイクから分けて、左手のカードの上にそのカードを返させ、右手のカードをのせてそろえます。

相手にパケットを渡して、「あなたがおぼえたカードの数だけ、1枚ずつ上から下にまわしてください」と言います。相手がそのように行うとき、また顔を横に向けています。

相手からパケットを受け取って左手に渡し、右手はケースをずらすなど、パケットから手を離すのを理由づける動作をします。またパケットをつかんだとき、ボトムカードを左手にギャンブラーズコップしてパケットを前に運び、手前に返してパケットを表向きにテーブルに置きます。そのとき左手は、コップしたカードが自然にカバーできるように、テーブルの縁に置くとか、体に沿わせるなどします。

パケットを表向きに置いたら、続けてリボンスプレッドします。「Aから10まで並んでいます」と言います。「5の位置のカードが裏返っていますから、あなたの選んだのはクラブの5ですね」と言い当てます。

相手に裏向きのカードを抜いて表向きにさせます。そのとき左手を左ポケットに入れます。相手が返したカードはジョーカーです。「あなたのカードはこちらにあります」と言って、ポケットから相手のおぼえたカードを取り出して見せます。

ここにあったカード

= 加藤英夫、2012年10月1日 =

私はブルース・サーボンの'テングィズズスリー'を読んで、すぐにでもレパトリーに入れるべきものだと感じました。と同時に、いくつか気に入らない部分がありました。ジョーカーをリバースしなければならないこと。最初に2までは見せるがAは見せないこと。顔を横に向けてカードを抜かせること。そしてAから10までよりも、AからKまで使いたいことなどです。その点すべてを修正し、しかもジョーカーが選ばれた数のカードの位置に出てくるということを演出で生かし、このバリエーションを作りました。

* 準備 *

裏向きのトップからクラブのK~Aとします。そしてblankフェイスカードのblank面に、「選ばれたカードは、ここにありました」と書いて、それをクラブの13枚のトップに裏を上に向けて置きます。私はパケットトリックとして用意しています。

* 方法 *

パケットを取り出し、表向きに両手の間に広げ、クラブのAからKがあることを見せます。バックにあるblankカードは見えないようにやります。

そろえて裏向きにして、「カードを何回かカットします」と言って、トップカードの下にブレイクを作り、ブレイクを利用してダブルカットをやります。ブランクカードがボトムに運ばれます。

ポケットを左手にのせて相手の方に伸ばし、「どこからでもいいですからカードをカットして持ち上げて、こちらに置いてください」と言って、右手をさし出して、カットされたカードを受け取ります。

相手がそのようにしたら、左手のトップカードを取って見ておぼえてもらいます。相手が見ているとき、右手のカードを左手のカードの下に入れますが、ボトムカードをバックルして、ブランクカードの上に入れ、下にまわしたカードの上にブレイクを作ります。そしてブレイクから分けて、左手のカードの上に選ばれたカードを返してもらい、その上に右手のカードを重ねます。

相手にポケットを渡し、あなたは横を向き、選んだカードの数だけトップからボトムにまわしてもらいます。前に向き直り、ポケットを左手に受け取ります。

何かセリフを言ったあと、ボトムカードをコップしてポケットを表向きにリボン Spredd しします。「AからKまでそろいました」と言います。AからKまで並んでいるということを強調すべく、指を Spredd の上でなぞり、ブランクカードのところで止めて、「あれっ、ここにへんなカードがありますよ。5のあったところです。もしかすると、あなたが選んだのは5でしたか」と問いかけます。相手は肯定します。

「ちょっと見てみましょう」と言って、ブランクカードを抜き出し、“あなたのカードは、ここにありました”という文面を見せます。

「でもいまは、あなたのカードはこちらにあります」と言って、選ばれたカードをポケットから現して見せます。

オーダーオブキングスプラス

= 加藤英夫、2012年10月1日 =

“Card Magic Library” 第10巻、184ページに‘オーダーオブキングス’を解説いたしました。その通りに演じるだけでも十分に強烈なトリックなのですが、2012年9月1日に開催された、千葉大学マジックサークルのOB/OG回において演じるときに、もう少し起承転結をつけたいと思いました。そしてつぎのような現象として演じることにいたしました。

* 現象 *

デッキをシャフルして混ざったのをよく見せたあと、デッキを両手の間に広げて相手に好きな1枚を取らせます。そしてそのカードを好きなところに表向きに入れさせます。そのカードがクラブの9であるとします。

それからデッキを2組に分けて、相手とマジシャンがそれぞれのポケットを2組に分けます。そしてそれぞれの組を広げるとAからKまでそろっていて、クラブの中には1枚だけ裏向きのカードがあります。「あなたが選んだカードはクラブの9でしたよね。ちゃんとクラブの8と10の間あります」と言って、クラブの8と10の間から抜いた表向きにして見せます。クラブの9です。

* 方 法 *

準備の仕方はまったく原案と同じです。方法説明の185ページ、下から3行目、“よく混ぜていることを証言してもらいましょう”というところまで、説明通りにやってください。

スプレッドを閉じてデッキを裏向きにして、両手の間に広げ、相手に1枚のカードを抜かせます。裏向きのまま持っていられます。相手が抜いたところから分け、右手のカードを左手のカードの下に入れてそろえます。そしてデッキを縦に返して表向きにして広げ、「あなたはこの中から自由に1枚選びました」と言います。そしてカードを閉じ、横方向に返して裏向きにします。これは、デッキの方向を反対にするためです。

つぎはプロフェシームーブを行います。すなわちデッキを両手の間広げて、相手が持っているカードを適当なところに入れさせ、突き出たままにして、その上でカードを分け、右手を返して突き出ているカードをつかみ、右手をもとの向きに返して、左手のカードの下にまわして全体をそろえます。それから突き出ているカードを押し込みます。相手が選んだカードはもとの位置に逆向きになって入れられることになりますが、ストリッパーの方向ももとの向きが保たれます。

あとは'オーダーオブキングス'の原案の通りに進めてください。裏向きのカードが入っている以外のポケットを先にスプレッドして、順がそろっているのを見せ、最後に裏向きのカードがあるポケットをスプレッドして、裏向きのカードを抜いて表向きにします。

* 備 考 *

せっかくこの強力なバリエーションを思いついたのですが、肝心の会合当日、このやり方をやるのを忘れてしまい、'オーダーオブキングス'のまま演じてしまいました。それでもレクチャーを締めくくるのには、十分なクライマックスではあったようです。

王家の栄光

= 加藤英夫、2012年10月1日 =

これも“Card Magic Library”第10巻に収録した、’オーダーオブキングス’のひとつのバリエーションです。どちらが良いとかではなく、どちらも状況に応じて使い道があります。

このバージョンは、客にカードを2組に分けさせるのではなく、マジシャンが1人で4組に分けるようにしたものです。その結果、現象としてもかなりショーアップされましたので、現象説明を書いておきます。現象説明中のセリフと方法説明中のセリフが必ずしも一致しませんが、そのへんはうまくアレンジしてください。

* 現象 *

デッキをよくリフルシャフルしてから、表向きにリボンスプレッドします。完全に混ざっています。「1組のカードには4つのマークがありますが、それは4つの国を象徴しています。それぞれの国には王様と王妃がいますが、彼らがいかに力を持っているかということ、これからお見せします」と話をします。そしてKとQをすべて表向きのスプレッドの中で裏向きに返します。そしてカードをそろえ、デッキを裏向きに持ちます。

「いまQとKはばらばらに離れていますが、まずQとKが会うところをお見せします。カードを4つの国に配ります」と言って、カードを4つの山にディールします。そうするとディールの途中で、ある組に表向きのQが置かれたあと、つぎにその組にディールされたとき、そのQと同じマークのKが置かれます。「ほら、同じマークのQとKがくっつきました」と言います。ディールを続けると、他の組において、そのように同じQとKが続けて置かれます。

ひとつの組を取り上げて、表向きのQとKがトップにくるようにカットします。それがダイヤだとしたら、「ダイヤの国の王様と王妃です」と言いながら、QとKをテーブルに表向きに置きます。そして残りのカードを裏向きのままQとKの上に置きます。

他のポケットでもQとKをトップにカットして、同じように行います。それからそれぞれのQとKの上のポケットを表向きにしてスプレッドすると、同じマークの13枚が勢揃いします。「というわけで、いかに王様と王妃の力が強いかがおわかりになったと思います」と言って終わります。

* 準備 *

ストリッパーデッキの52枚の向きをそろえ、表向きでマーク別に分け、左からダイヤ、クラブ、ハート、スペードの順に並べます。それぞれの13枚を表向きで上からAからKの順に並べます。そのあと、クラブのパイルは8がフェースに出るようにカットします。ハートはJがフェースに出るように、スペードは4がフェースに出るようにカットします。ダイヤのパイルはそのままです。

左端のポケットから右端のポケットに向かって、上から1枚ずつカードを取って左手の上に重ねていきます。右端を取ったら左端に戻って全部のカードを取り続けます。

*** 方 法 ***

デッキを取り出して、表向きにリボンプレッドします。「カードはよく混ざっていますが、さらによく混ぜます」と言います。リフルシャフルするために2組に分けてテーブルに置きますが、一方の組を方向違いとします。そしてリフルシャフルします。

リフルシャフルしたら、もういちどデッキを表向きにリボンプレッドしますが、広くスプレッドします。所々を指先で広げて、「カードは数もマークも完全に混ざっています」と言います。この状態ではいくら見られても配列を見抜かれる心配はありません。(原案の'オーダーオブキングス'よりもよく混ざっていて、いくら見られても大丈夫です)。

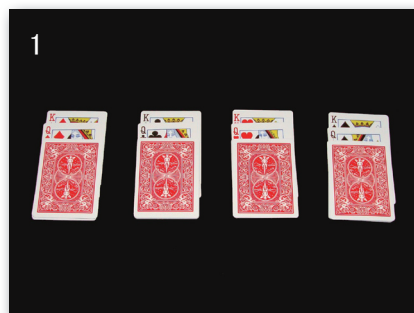
「完全に混ざっていることが重要ですので、そちらのお客様、証人としてカードをよく見てください。数やマークがまったくでたらめに並んでいるのを確認してください」と言って、1人の客によく見てもらいます。

「1組の中には4人の王様と4人の王妃がいます。QとKを逆向きにします」と言って、スプレッドを端からトレースしてQとKを見つけ、それぞれのQとKを抜いて横向きに裏返し、もとの位置に入れます。「そしてKとQが離ればなれになっていることを強調します。

スプレッドを閉じ、デッキを裏向きにして、方向違いを抜いてカットします。「1組の中に王様と王妃が4組ありますが、4つの国に分けることにします。そのとき王様と王妃に不思議なことが起こりますので、よく見ていてください」と説明し、左から4つの組にディールします。初めて同じ組にKとQが置かれたとき、「ほら、同じマークのKとQが出会いました」と言います。そのあとKとQが置かれたら、セリフは言わず、ほんの少し間をとります。

すべてディールしたら左端のポケットを取り上げ、広げてKとQがフェースにくるようにカットします。たいてい左端のポケットではKとQがいちばん上にあります。Kをテーブル前方に表向きに置き、その上にQを表向きにずらして置きます。残りのカードはそれら2枚の手前に裏向きに置きます。

他の3組でも同様に行います。いま図1の状態となりました。



「このように4つの国に王様と王妃が別れました。ということは、それぞれの国の臣下や国民たちもそろっているはずですよ」と言って、各裏向きのポケットを取り、表向きにしてKとQの上で前方にスプレッドします。図2。



「4つの国が成立して、このマジックも成功いたしました」と言って、両手を広げてポーズして終了します。

逆作用シャフル

= 加藤英夫、2012年10月2日 =

‘オーダートリック’を特集しようとしたとき、まっ先に“Card Magic Library”第7巻、34ページに収録された、マーチン・ガードナーの‘インディストラクティブシーケンス’を思い出しました。そしてそれを再読したとき、「待てよ、これで一般の人々に不思議さを明確に表現できるのだろうか」という疑問が持ち上がりました。

Aから7まで順番にした7枚をトップにおき、そこからリフルシャフルするというのが、マジシャンでない人にとって、状況としてピンとくるものではないかもしれません。それより、Aから7をデッキの中に分散して入れた状態で、リフルシャフルした方がよいのではないのでしょうか。

それを実現するにはすぐ2つの方法を思いつきます。マルチプルシフトで分散して入れたように見せて、1カ所に集めるやり方と、ブラウエアドオンですり替えたカードを分散させて入れるやり方です。

2つの方法では、ブラウエアドオンに軍配が上がります。マルチプルシフトを使うと、Aから7が順に並んでいるためには、入れるときに順番に入れる必要がありますが、ブラウエアドオンなら、すり替えたカードをでたらめな順でデッキの中に入れていたように見せられるからです。

そしてもうひとつ思いついたことは、シャフルしたのにAから7の順番が変わらない、という現象2回繰り返すのが良いことなのだろうか、と言うことです。むしろ第2段においてリフルシャフルしたあと、Aから7までがくっついてデッキ中央にあった方がよいのではないかとひらめいたのです。ということは第1段と第2段の現象がつぎのようになります。

第1段では、でたらめの順でデッキの中に入れてAから7が、分散された状態のままでAから7の順に変化します。第2段では、さらにシャフルすると分散していたAから7が集合します。そのように考えたとき、‘逆作用シャフル’という演出を思いつきました。

* 方 法 *

スペードのAから5までを表向きにテーブルに抜き出します。デッキを裏返して持ち、スペードの5枚を取ってデッキの上に置き、フェースからAから5の順に並べ替えます。そのとき手は45度ぐらい手前に傾けておき、スペードの表面が相手に見えないようにします。

並べ替えた5枚をそろえるとき、それらの下の裏向きの4枚の下にブレークを作ります。トップから9枚目の下にブレークを作ることになります。そしてブラウエアドオンを行います。

4を置いたときに、いったん右手の残り全部を置くわけですが、そのとき置いた5枚とスペードの4の間にブレークを作ります。そして5を裏返します。

「スペードのAから5までを、1組の中にバラバラに分散させます」と言って、トップカードを右手に取り、左上コーナーでブレーク上の4枚をプッシュして、ずれた部分で、右手の1枚をトップから5枚目に入れます。図1。



アップジョグ状態で止めて、アップジョグカードを指さし、「1枚目は上の方に入れます」と言って、そのカードを押し込みます。

「2枚目はずっと下の方に入れます」と言って、つぎのカードをボトム近くに入れて押し込みます。

「3枚目はちょうどまん中ぐらいに入れます」と言って、中央に入れて押し込みます。

「4枚目はかなり下の方に入れます」と言って、下から12、3枚目に入れて押し込みます。

「5枚目はかなり上の方に入れます」と言って、上から12、3枚目に入れて押し込みます。

「皆さん、シャフルというのはカードを混ぜることですが、マジックの不思議な世界では、逆作用シャフルというのが存在します。いまスペードのAから5までは、1組の中ででたらめな順番になっていますが、逆作用シャフルするとどうなるかご覧にいきましょう」と言います。

ここでリフルシャフルを3回続けて行います。なるべくよく混ぜるような細かいシャフルをやります。3回目は念のため、上半分を下半分より少し多くカットしてやります。

ここで'インディストラクティブルシークエンス'と同様に、デッキを表向きに右手のビドルポジションに持ち、左手に1枚ずつ取っていき、スペードのAから5までが順番になったことを見せながら、スペードの5枚をバックに集めます。

「もっと逆作用シャフルを行うとどうなるでしょう」と言って、デッキを裏向きにしてリフルシャフルしますが、トップの5枚が離れないようなやり方をします。ただし、5枚を最後にまとめて落とすのではなく、5枚をまとめて落としたり、反対の方から最後の1枚を落とすようにします。

もちろん5枚を正確にまとめて落とすのではなく、5枚より少し多くまとめて落とすようにします。3回そのようにリフルシャフルしたら、1回カットして、スペードの5枚を中央に運びます。

「さて逆作用シャフルをこれだけやると」と言って、デッキを表向きにリボン Spredd します。そしてスペードのAから5の左右のカードを左右にずらして、スペードの5枚を前に押し出して広げて見せます。図2。



「このように5枚が集まってしまうのです」と言って終わります。

ダブルスウィンドル

= 加藤英夫、2002年6月25日 =

* 準備 *

ストリッパーデッキからダイヤのAから10を抜き出して使います。Aから5までの幅の広い方を手前に向け、6から10までの5枚を反対の方向にします。そしてトップからAから10の順にセットします。

* 方法 *

10枚を見せてから、順番を混ぜると言って、トップから5枚を順が変わらないように右手に取り、右手のトップカードをテーブルに置き、つぎに左手のトップカードをその上にのせます。つぎに右手、つぎに左手というように交互にカードを重ねます。

10枚を取り上げて表向きに広げ、混ぜたことを見せます。カードを閉じて裏向きにします。「さらにカードを混ぜます」と言いながらトップの2枚を右手に取り、「あなたが“そのまま”と言ったら、そのまま2枚を置きます」と言って、2枚をテーブルに置く真似をします。「あなたが“入れ替え”と言ったら、2枚を入れ替えてから置きます」と言って、2枚の上下を入れ替えてテーブルに置く真似をします。2枚をもとに戻して左手のカードの上に戻します。

「それでは始めましょう」と言って上から2枚を取り、相手に“そのまま”とか“入れ替え”と言わせて、その通りに2枚ずつ置いていきます。

全部テーブルに置いたら 10 枚を取り上げます。「1 回カットします」と言って、手前が幅の広い 5 から 10 を引き抜き、それらをテーブルに置いて、残りの 5 枚をその上にのせます。これでカードの順番は 10 から A の順に並びました。10 枚を取り上げます。

「さらに細かく混ぜるために、あなたが “そのまま” と言ったら、1 枚をそのまま置きます。“入れ替え” と言ったら 2 枚を入れ替えます」と説明し、'スウィンドルオブソーツ' と同じ操作を行います。カードを順番に表向きにすると、A から 10 まで順番に並んでいます。

割り切れるマジック

= 加藤英夫、“マジックカフェ”、2002 年 12 月 15 日 =

面白い原理を見つけました。12 枚の絵札をつぎの順にセットして実験してみてください。

裏向きで上から、JC、QC、KC、JH、QH、KH、JS、QS、KS、JD、QD、KD。

12 枚のポケットを左手のディーリングポジションに持ちます。上から 2 枚のカードを取ってテーブルに置き、以下すべてのカードを 2 枚ずつディーリングしていきます。ディーリングしたカードを取り上げ、こんどは 3 枚ずつディーリングします。またディーリングしたカードを取り上げ、こんどは 4 枚ずつディーリングします。最後は 6 枚ずつディーリングします。

以上のように、2 枚ずつ、3 枚ずつ、4 枚ずつ、6 枚ずつのディーリングを行った結果、トップの 4 枚は J、つぎの 4 枚は Q、最後の 4 枚は K となっています。

* 準備 *

前述の順にセットした 12 枚のポケットを 2 組作ります。

* 方法 *

「12 という数は、2、3、4、6 のどれでも割ることができます。ですからあなたと私で 12 枚ずつカードを持ち、それらの数で割る実験を行います」と説明して、一方の 12 枚を相手に渡し、他方の 12 枚をあなたが持ちます。

あなたと相手が同時に、2 枚ずつディーリング、3 枚ずつディーリング、4 枚ずつディーリング、6 枚ずつディーリングを行います。あなたは所々でフォールスディーリングを行います。

2 枚ずつディーリング

2 枚ずつディーリングにおいては、2 枚取って置いたように見せて、1 枚サブトラクトして 1 枚だけ置く

のと、2枚取って置いたように見せて、1枚アディクションして3枚を置くのと、そして2枚置く場合があります。それらをたんに、1枚、2枚、3枚と表記すると、つぎのような順で置くことになります。

2枚、1枚、2枚、1枚、3枚、3枚。

3枚ずつディール

3枚ずつのディールでは、フォールスディールなしに、つねに3枚ずつディールします。

4枚ずつディール

4枚広げてそろえるとき1枚サブトラクトして3枚を置き、つぎも同様に4枚広げて1枚サブトラクトして3枚置き、残りは4枚のように広げて見せ、そろえて6枚を置きます。

6枚ずつディール

6枚ずつのディールでは、フォールスディールなしに、6枚ずつディールします。

以上が終わったら、「2人で同じやり方をしましたが、魔法のかけ方によって、結果が違ってきます。私の方にはこのようにバツバツと魔法をかけます」と言って、あなたのポケットに対して、手を広げたり縮めたりする魔法のかけ方をします。

「するとこのような結果になります」と言って、トップから3枚ずつ取って、表向きにして見せていきます。どれも同じマークのJとQとKになります。

「あなたの方にはこのようにグルグルまわして魔法をかけてください」と、グルグルまわす手つきを見せ、相手にそのようにやらせます。

それから相手には上から4枚ずつを表向きにさせます。4枚のJ、4枚のQ、4枚のKというように、フォーオブアカインドで現れます。

加藤英夫のホームページ

<http://www.magicplaza.gn.to/>

Card Magic Magazine 第 20 号

発 行 2013 年 12 月 6 日

著 者 加藤英夫

発行者 加藤英夫

hae16220@ams.odn.ne.jp

